

# 「慚愧」のもたらすもの

——『日本靈異記』において

蝦名 翠

## 1

延暦六年（七八七）九月四日の酉の刻、在俗のまま仏法修行に励む景戒は、突如として「慚愧」にかられ、次のように嘆いた。（以下、『日本靈異記』本文は多田一臣校注『日本靈異記』〔ちくま学術書房・平成九年〜平成十年〕による）。

同じ天皇（稿者注・桓武天皇）の御世の延暦六年丁卯の秋九月の朔の四日甲寅の酉の時に、僧景戒、慚愧の心を発し、憂愁へ嗟きて言はく「嗚呼、恥しきかな、羞しきかな。世に生れて命活き、身を存へむに便無し。等流果に引かかるが故に、愛網の業を結び、煩惱に纏われて生死を継ぐ。八方に馳せて生ける身を炬し、俗

家に居て妻子を蓄ふ。養ふ物無く、食ふ物無し。菜無く、塩無く、衣無く、薪無し。毎に万の物無くして、思ひ愁へて、我が心安からず。昼も復飢え寒い、夜も復飢え寒ゆ。我、先の世に布施の行を修せずありき。鄙なるかな、我が心。微しきかな、我が行」といふ。（『日本靈異記』下巻第三十八縁「災と善との表相先づ現れて、後に其の災と善との答を被りし縁」）

景戒は己の半生を振り返り、僧の身でありながら、妻子を抱え衣食にも事欠く貧しい生活に追われる惨めな日々の所以を、前世に「布施の行」を修めなかつたからと結論づけて、己の心と行ないの卑しさを恥じ憂い、「慚愧」している。その夜、彼はある「夢」を見て、さらなる「慚愧」の

念にかられることになる。

然して、寝てある子の時に、夢に見らく「乞食する者、景戒が家に来りて、経を誦し、教化して云はく、『上品の善功德を修すれば、一丈七尺の長身を得む。下品の善功德を修すれば、一丈の身を得む』といふ。爰に景戒聞きて、頭を廻らして、乞ふ人を睨れば、紀伊の国名草の郡の部内楠見の村に有りし沙弥鏡日なり。徐く就きて見れば、其の沙弥の前に、長さ二丈許り、広さ一尺許りの板の札有り。彼の札には、一丈七尺と一丈とを印すなり。景戒見て問ふ、『斯は是れ、上品と下品との善功德を修する人の身の印なりや』といふ。答ふらく『唯然り』といふ」(同)

夢に現れたのは知己の沙弥鏡日であった。夢の中で乞食僧となっている彼は、景戒の家を訪ねて読経し、「上品の善功德を修すれば、一丈七尺の長身を得む。下品の善功德を修すれば、一丈の身を得む」と、上品・下品の善功德を積む大切さと前世の功德が現世で報われることを示す。鏡日の言葉を聞き、さらに、前世において上品・下品の善功德を積んだ人間の身長が、鏡日の前にある「長さ二丈許り、

広さ一尺許り」の板に書かれているのを見た景戒は、二度目の「慚愧」の念を発す。

「爰に景戒慚愧の心を発して、彈指して言はく、『上品と下品の善を修すれば、身の長きを得ること、是くの如きに有り。我、先に唯下品の善功德だにも修せずありき。故に、我、身を受くること、唯五尺余り有るのみ。鄙なるかな』といひて、彈指して悔い愁ふ。側に有る人、聞きて皆言はく『嗚呼、当れるかな』といふ」(同)

高い身長が前世に善功德を積んだ善報というのならば、五尺余りの身長の方は下品の善功德すら積んでいなかった、ということだ。俗世にまみれ貧しい生活を送っている自分の不幸が因果応報によるものであったことを「夢」を通して改めて確認した景戒は慚愧し、「彈指して悔い愁ふ」のである。

夢から覚めた景戒は自ら夢を解こうとする。「慚愧」に関しての彼の夢解きは以下の通りである。

「慚愧の心を発して、彈指して恥ぢ愁ふ」とは、本有種子、智行を加へ行へば、遠く前の罪を滅し、長に後

の善を得るなり。「慙愧す」とは、鬢髮ひげかみを剃除そり、袈裟けさを被着きるなり。「彈指す」とは、罪を滅して、福を得るなり。

本有種子は先天的に存在する悟りの種子で、現行によって成長させられる性質である。それに対し、外部からの現象によって植えつけられ現行によって薰習される、いわば後天性の悟りの種子が新熏種子しんくんしゆじである。景戒は、自分の心に芽生えた慙愧をさらに促すことになった夢を解くにあたり、その夢の中の慙愧を、法相教学の本有種子にかかわるものであったと位置づけている。

中村史氏は景戒の夢告を己の過去生での不布施を懺悔する悔過行の象徴的再現であるととらえ、景戒の「慙愧」を「前世の不布施という罪を滅するため、これを告白し自ら辱めたもの」（『日本霊異記』下巻第三十八縁に於ける景戒の観音悔過体験）『論究日本文学』五十八（平成五年）所収）と定義している。従うべきであろう。景戒は、夢に登場した象徴的なモチーフ——鏡日の板札の印の真の意味を解き、そのことよって己の現世での不幸の由縁——前世での不信心によるものであることを確信する。そして、自らの前世と現在の罪を悟り、その罪と恥を告白し「慙愧」することに

よって、仏道修行に専心する決意をするのである。

「慙愧」は、心に恥じて内省を促す「慚」と、人や世間、さらには天といった外部へとそれが及ぶ「愧」で構成されている。『北本涅槃経』卷十九・梵行品では、「慙」は「自ら悪を作さず」「内に自ら羞ぢ」「人に羞ぢ」るもの、それに対して「愧」は「他を教へて作さしめず」「発露して人に向かい、「天に羞づ」ものであると定義されており、この「慙」と「愧」のふたつの「白法」あつてこそ、よく衆生を救済し得る、と説く。「慙愧なき者は名づけて人となさず」のくだりに、涅槃経に限らず仏教全般にとつての「慙愧」の重要性がうかがわれる。

諸仏世尊常に此言を説く二の白法あり、能く衆生を救ふ、一には慚、二には愧なり。慙は自ら悪を作さず、愧は他を教へて作さしめず、慙は内に自ら羞ぢ、愧は発露して人に向ふ。慙は人に羞ぢ、愧は天に羞づ。慙なき者は名づけて人となさず、名づけて畜生となす。慙愧あるが故に則ち能く父母師長を恭敬す、慙愧あるが故に父母・兄弟・姉妹ありと説く。

（『北本涅槃経』十九・梵行品）

内省と、他者（天もまた他者である）に向かつての発露・懺悔により「衆生」は救われるのである。「慚愧」という感情は景戒にとってはひとしお巨大な存在だったようだ。『日本霊異記』上巻序ですでに、「善悪の報は、影の形に随ふが如し。（中略）慚愧する者は、倏に悸きしみ、起ち避る頃を忿ぐ」と、「慚愧」が言及されている。また、中巻序の末尾「天に愧ぢ人に慙ぢ、忍びて事を忘れ、心の師と作りて、心を師とすること莫かれ」が、『北本涅槃経』梵行品の「慚は人に羞ぢ、愧は天に羞づ」の影響をあからさまにうけているのは明白である。下巻序には「慚愧」の語はないが、「遠く前の非を愧ぢ、長に後の善を祈ふ」という一文が登場する。景戒にとつて「慚愧」とは、その宗教人生の転回のきつかけとなる、重大な心理的動きであつたといえよう。

## 2

『日本霊異記』において「慚愧」が登場する説話は、上巻序と下巻第三十八縁の他には中巻の第七縁・第九縁・第十三縁がある。

中巻第七縁「智者、変化の聖人を誹り妬みて、現に閻羅の闕に至り、地獄の苦を受けし縁」では、「天年聡明にして、智恵第一」と讃えられる官僧智光が、聖武天皇の厚い信頼

を受けて大僧正にまで上り詰めた沙弥行基に嫉妬して「吾は是れ智人なり。行基は是れ沙弥なり。何の故にか、天皇、吾が智を齒へたまはずして、唯し沙弥をのみ誉めて用ゐたまふ」と非難し、その誹謗の罪はたちまち報いを受けることになる。病死した智光は地獄へ墮ち、「葦原の国に有りて行基菩薩を誹謗」罪によつて九日にわたり苦行を受ける。蘇生した智光は弟子たちに自分の体験を語つた後、「大徳に向ひて、誹り妬む心を拳せしことを言さむ」と決意して行基を訪ねる。

智光、菩薩のみ所に、誹り妬む心を致して、是の言を作せり。『光は古徳の大僧、加以智光は智者なり。行基沙弥は浅識の人にして、具戒を受けず。何の故にか、天皇、唯し行基をのみ誉めて智光を捨てたまふ』といひき。口業の罪によりて、閻羅王、我を召して鉄・銅の柱を抱かしむ。経ること九日にして、誹謗の罪を償ふ。余罪の後生の世に至らむことを恐り、是を以て慙愧発露す。当に願はくは罪を免れむことを」といふ。

（中巻第七縁）

菩薩の悟りを得、来世は「金の宮」に住むことが約束さ

れている聖人行基に嫉妬し誹謗した智光の罪は、地獄での苦行によって償われた。にもかかわらず、蘇生した彼が直接行基に会い「慙愧発露」したのは、自分の余罪が償いきれずに後生に残ることを恐れているからに他ならない。行基「菩薩」に対して「慙愧発露」することで、智光の罪ははじめで完全に償われ、知識第一の官僧智光は、景戒をはじめとする私度僧や優婆塞らが支える民間仏教の星であった行基「菩薩」に帰依する。そのためには、地獄での罪業消滅のための苦行の他に、行基その人への「慙愧」が必要だったのだ。

中巻第九縁「己寺を作り、其の寺の物を用ゐて、牛と作りて役はれし縁」は、多摩郡大領をつとめる大伴赤麻呂が、自ら造営した寺の物品を使い返さないまま死に、牛に転生する物語である。その牛の斑文が、赤麻呂の生前の罪としての罪報としての牛への転生を説明するものであったため、赤麻呂の「諸の眷属と同僚」は「慙愧の心」を発し、「罪を作すこと恐るべし。豈報无かるべからむや。此の事は季の葉の楷模に録すべし」と思うに至るのだった。寺物を使って返さないことは『日本霊異記』ではきわめて重い罪として扱われ、上巻第二十縁・中巻第三十二縁・下巻第二十三縁でも取り上げられている。上巻第二十縁「僧、湯を涌か

す分の薪を用ちて他に与へ、牛と作りて役はれ、奇しき表を示しし縁」では、大方等経からの引用として「四重五逆は我も亦能く救はむ。僧の物を盗む者は我が救はぬ所なり」と述べる。その姿勢は中巻第九縁でも変わらないが、牛に転生した赤麻呂の罪報が、赤麻呂の親族や同僚たちの「慙愧」と発心を促している点に着目したい。彼らは赤麻呂の受けた罪報におののくと共に、自分たちの身の上を振り返り、罪を「慙愧」し、心を改めて仏道に帰依したことである。中巻第九縁は、「此の事は季の葉の楷模に録すべし」の言葉のとおり記録されて諸人に伝えられたと書かれるが、その直後に、「冀はくは、慙愧无き者も、斯の録を覽て、心を改め善を行はむことを」と、この縁を読んでいる受容者に呼びかける。この罪報譚を読んで、「慙愧」なき衆生にも「慙愧」の心を発するよう促している。第七縁が己の愚行に「慙愧」する物語であるとすれば、第九縁は他人の愚行を見て己の行動に思いを馳せ「慙愧」する物語である。

中巻第七縁・第九縁は、自らの罪を自覚させられた上で「慙愧」が発心・回心へとつながってゆく点、その発心・回心こそが説話自体の大きなテーマになっている点において、下巻第三十八縁の「慙愧」と共通している。

稿者は以前、『日本霊異記』において「ハヂ」という感情

が、己を見つめ直し発心へと促される性格のフアクターとして機能していることを指摘した(蝦名「日本霊異記」における「慚愧」『国文学解釈と鑑賞』七十二―八〔平成十九年八月〕所収)。共同体とのかかわりから生まれる「ハチ」が仏教と結びついた時、「ハチ」を覚えた全ての人間——当事者、目撃者、そして説話を通して「ハチ」を読む受容者が発心を促される機能を果たすことになる。

『日本霊異記』中に登場する「ハチ」の説話については、仏道に外れた行ないを(既述・未遂共に)恥じる「ハチ」、窮乏や病・身体障害など、克服のきわめて困難な現世での不幸を、前世での罪報として恥じる「ハチ」の二種類がみられる。

例えば上巻第十縁の「ハチ」は、前者の「ハチ」の代表的なものである。方広経の法要に請われた路行の僧が夜、「被」<sup>かすま</sup>を盗もうとしてその家の牛に咎められ、さらには牛が前世家の主人の父であり、息子の稲を十束盗んだ罪報として牛に生まれ変わったことが語られた直後「汝は是れ出家なり。何ぞ輒く被を盗む」と言われ、「愧ち」ている。また中巻第二十九縁では、猪の油を頭に塗って行基の説法を聞きにきた女が、「彼の頭に血を蒙れる女は、遠く引き棄てよ」と嘖まれ、女は「恥ち」て退出する。「ハチ」を覚えるのは

悪行の当事者だけではない。下巻第二十六縁、生前慳貪の限りを尽くし人々を苦しめてきた田中真人広虫女が死後、半人半牛の姿で蘇り衆人にそのおぞましい姿をさらした時、「愧恥」<sup>は</sup>ているのは広虫女の夫である大領と子息たちだ。彼らはその「愧恥戚へ慟」<sup>た</sup>む心に突き動かされ資財を投げうって寄進に励み、広虫女の罪業が消滅するようにとつとめる。上巻第十縁と中巻第二十九縁では仏道に外れた(外れようとした)者が「ハチ」で改心し、下巻第二十六縁では悪報を受けた者の家族が「ハチ」で家族の救済のために仏道へとたちかえる。

後者としては中巻第十四縁、中巻第三十一縁、下巻第二十一縁、下巻第三十八縁などが挙げられる。中巻第十四縁の主人公は零落し窮乏した女王で、親族の王たちに設けるべき宴席の食事を用意するあてもなく、「貧報」を「恥ち」る。信仰する吉祥天女像に向かい、彼女は「我、先の世に貧窮の因を殖えて、今窮報を受く。(中略)願はくは我に財を賜へ」と訴える。女王は、現在自分が貧しさに苦しんでいる原因を、前世に「貧窮の因」を植えたため、「窮報」を受けているのだと認識している。現世での貧しさは罪報であり、まさにそうなる因を前世に植えたことに由来しているのだ。また中巻第三十一縁と下巻第二十一縁は、病や障

害に対する「ハヂ」である。下巻第二十一縁は後天性の失明をわずらった僧長義が「日に夜に恥ぢ悲しびて」、多くの僧を招き三日三夜の『金剛般若経』読誦によって視力を取り戻す物語だが、長義はこの失明を前世の悪業の報いによつてもたらされたと認識しているのは明らかである。中巻第三十一縁では老夫婦が生まれつき手の開かない娘を産み、「嫗、時に非ずして子を産み、根具ねぐはらず、斯れ大きな恥とす」と述べるが、彼らのいう「恥」とは、本来子供が授かるはずのない高齢で子供を産んだということと、生まれたい子供が「根」備わらなかつたということであろう。

仏教から外れた行ないを恥じる「ハヂ」、現世でのどうにもならない不幸を前世の罪報としてとらえ恥じる「ハヂ」は、現世と前世の違いはあれ、己の不信心を責め、物語を仏教的な救済の展開へと導く役割を果たしている点で共通している。「ハヂ」そして「慚愧」は、仏教説話集『日本霊異記』において登場人物を、そして受容者をも発心と救済へと導く、重要な役割を果たしているといえよう。

### 3

それらに対し、中巻第十三縁「愛欲を生じて、吉祥天女の像に恋ひ、感応して奇しき表を示しし縁」の「慚愧」は、

一見性格を異にしているようにみえる。

中巻第十三縁で「慚愧」にかられるのはひとりの優婆塞である。中巻第十三縁は、続く第十四縁「窮しき女王、吉祥天女の像に帰敬しまつり、現報を得し縁」と共に、厚い信仰と切なる祈りに対して吉祥天女が応える、という吉祥天女の感応譚・靈験譚であり、主人公の「慚愧」は一見、そのテーマとは一種のずれがあるかのように写る。中巻第十三縁において、「慚愧」は説話としてのプロットにおいてどのような役割を果たしているのだろうか。

和泉の国泉の郡の血淳の山寺に、吉祥天女の孺像せみぎょう有りき。聖武天皇の御世に、信濃の国の優婆塞、其の山寺に來り住みき。天女の像みかためかりうに睇みちて愛欲を生じ、心に繋けて恋ひ、六時毎に願ひて云はく、「天女の如き容好かほき女を我に賜へ」といふ。優婆塞、夢に天女の像に婚ふと見る。明くる日に瞻まはれば、彼の像の裙もの腰に、不淨染み汚けがれたり。行者視て、慚愧して言さく、「我、似たる女を願ひしに、何ぞ忝かたじけなくも、天女專まに自ら交りたまふ」とまうす。媿はにかぢて他人に語らず。弟子、偷ひそかに聞く。後、其の弟子、師に礼なきが故に、嘖おめて擯おひ去る。擯おはれて里に出で、師を誂そしりて事を程あらず。里人聞きて、

往きて虚実を問ひ、並びに彼の像を瞻れば、淫精染み穢れたり。優婆塞、事を隠すこと得ずして、具に陳べ語りき。諒に委る、深く信くれば、感応せずといふこと无きことを。是れ奇しく異しき事なり。涅槃経に云へるが如し。「多淫の人は、画ける女にも欲を生ず」とのたまへるは、其れ斯れを謂ふなり。(中卷第十三縁)

山寺の吉祥天女像に、主人公の優婆塞は愛欲を覚えた。吉祥天女の塑像に「睇ちて愛欲を生じ、心に繋けて恋」う優婆塞の姿は、人間の女に恋い焦がれる俗人の男の姿と何ら変わりが無い。「睇」は『類聚名義抄』に「ナガシメ」と付訓があることからもうかがえるように、主に異性の心をひくのを目的に流し目や色目をつかうことをさす。『日本霊異記』中では上巻第二縁、人間の男が美女(に化けた狐)の誘いに応えるのに、「睇」で応えている。本物の人間の女に對するかのように吉祥天女に激しく恋慕し、愛欲を抱いた優婆塞は、結果、六時毎——一日六度の勤行のたびに、「天女の如き容好き女」を我がものにできるよう、吉祥天女像に願をかけていた。

その願いが、「夢」という形を通して報いられることになる。ある夜、「天女の像」と「婚ふ」夢を見た優婆塞は、翌

朝目覚め、当の吉祥天女像の喪の腰の部分に「不浄」すなわち精液が染みついているのを発見する。靈験譚には、仏が靈験を現実に示した証が不可欠であり、中卷第十三縁の場合はその「不浄」こそが、吉祥天女像が夢を通して優婆塞と交わった証拠である。

西郷信綱氏が『古代人と夢』(平凡社・昭和四十七年)で指摘したとおり、夢は魂の働きによって見られるものであり、それゆえに現実では不可能な、異世界との交流のチャンネルになり得た。言い換えると、現実に生きる人間である修行者が神仏の示現を得る機会は、夢しかない。従って人は「こもる」状況に我が身を置き、夢を求めるのだ。多田一臣氏は、「修行者のような宗教者にとつて、夢が神(仏)と交流する特別な回路であったことを考えるべきだが、同時に夢の世界が現実とは異なるもう一つの実在であったとする古代的な心性の現れをここに見ることもできる」とし、優婆塞が吉祥天女像と交わった夢の世界も、まさしく現実のものとしてとらえられていたと述べる(多田「古代の夢——『日本霊異記』を中心に」『文学』六一五(平成十七年九月)所収)。優婆塞は「夢」を通して、実際に吉祥天女と交わってしまったのである。

吉祥天女の示した靈験は、後日衆人(「里人」)の目にも呈



示され、優婆塞の告白によって普遍化される。むすびに景戒がこの説話の主旨として述べるのは、「諒に委る、深く信くれば、感応せずといふこと无きことを。是れ奇しく異しき事なり」であり、まさしく吉祥天女への深い信仰が、この奇跡を呼んだとされている。三浦佑之氏は、本来個的な存在である「夢」が「不浄」という証によって表面化・現実化し、それが弟子を經由して里人に知られる——仏による共同体に支えられることによって、現実の仏の示現へと展開するのだ、としている（三浦「靈異記説話の〈夢〉——〈こもり〉幻想における仏との出会い——」『古代文学』十九（昭和五十五年）所収）。感応の証の「不浄」が里人の目にさらされることで、吉祥天女の感応譚は完成する。

しかしこの説話では、吉祥天女の靈験が衆人の目に触れるまでには少々回り道をするようになる。優婆塞の「慚愧」こそが、その最大の理由である。吉祥天女と夢を通して交わったことを、吉祥天女像の「裙の腰」に「不浄」が染みているのを見て知った優婆塞の反応は「我、似たる女を願ひしに、何ぞ忝くも、天女専に自ら交りたまふ」という「慚愧」であり、「媿ぢて」他人に語ろうとはしなかった。結局この事実が衆人に知れ渡るようになったきっかけは弟子の盗み聞きであり、この弟子が師によって寺を追われた恨み

から、里人たちに師と吉祥天女像との一件を言いふらしたことにある。弟子が「訕りて」事実を明るみに出した、という表現からも、夢の中でのこととはいえ、吉祥天女像と優婆塞との交接が、客観的にも必ずしも肯定的に受け止められているわけではないことが読み取れる。実際、中巻第十三縁の末尾で、深い信仰に必ず感応してくれる吉祥天女の奇跡の讚美に続いて書かれているのは、涅槃経からの引用だという、「多淫の人は、画ける女にも欲を生ず」であり、「其れ斯れを謂ふなり」まさにこの優婆塞こそ、この「多淫の人」と同じことである、という指摘なのだ。

優婆塞は、あくまで美しい吉祥天女像のような美女を願ったのに過ぎず、吉祥天女像自身が夢を通して自分と交わったという事実におののき、「慚愧」し「媿ぢて」いる。彼の「慚愧」は、吉祥天女像との夢中の交接が現実のものであったことを、吉祥天女像に染みついた自身の不浄という形で目の当たりにし、自分の望みがあくまで「天女の如き容好き女」であったにもかかわらず天女像自らが夢を通して交わったという重大な事実にある。自身の不浄によって吉祥天女像を汚してしまったことに対する罪の意識も加えてよいであろう。

五戒に「不邪淫戒」が含まれていることを挙げるまでもなく、修行者の淫欲は厳しく戒められるべきものであつた。不邪淫戒は主に在家信者に向けられた戒であり、その字のとおり「邪淫」＝よこしまな性行為を禁じている。よつて、その戒を破り「邪淫」を犯した者には、違わず罪報が下される——という説話は『日本霊異記』にもいくつか登場する。

中巻第十一縁「僧を罵ると邪淫するとにより、悪しき病を得て死にし縁」は、仏法僧を侮辱し「邪淫」を犯した「凶しき人」を主人公とする悪報譚である。その男は、八斎戒を守り悔過の法会に参加していた妻に怒り、導師をつとめる禪師に「汝、吾が妻に婚す」などと罵詈雑言を吐いて妻を連れ帰ると、すぐさま妻を犯した。その応報は「卒爾にはかに閉に蟻著きて嚼み、痛み死にき」という、きわめて迅速かつ直接的なものであつた。景戒は、「刑を加へずと雖も、悪心を発し、濫しく罵りて恥づかしめ、邪淫を恐りぬが故に、現報を得たり」と結論し、僧を罵倒する罪と共に「邪淫」を犯す罪をも指弾している。「凶しき人」が犯したのは妻であつたが、この妻は八斎戒を守っていた。八斎戒には僧尼に課せられる不姪戒——夫婦関係も含め性行為全般を禁ず

る——が含まれるため、不姪戒を守るべき女性を、たとえ夫とはいえ強引に犯して戒を破らせることは重大な罪悪だつたのである（寺川眞知夫「『霊異記』の欲邪行説話——不姪戒・不邪淫戒と靈験と——」説話と説話論集の会編『説話論集』十一（清文堂・平成十四年）所収）。

「邪淫」を犯した人間が直接的な悪報を受ける説話は他に、下巻第十八縁「法花経を写し奉る経師、邪淫を為して、現に悪死の報を得し縁」がある。法華経を写経中の写経師が手伝いの女を堂内で犯そうとして「閉の間に入るに随ひて」まさにその瞬間に、手を携えたまま共死する。女は「口より瀉あを嚙齧み出して」死ぬというすさまじさで、彼らの苦悶の死について景戒は「護法の刑罰」であると解き、続けて次のように断ずる。

愛欲の火は身心を焦こがすと雖も、姪たはれの心に由りて、穢けき行を為さざれ。愚人の貪る所は、蛾の火に投るが如し。所以に律に云はく「弱脊じやくせき自ら面門に姪す」とのたまへり。復涅槃ねはん經に云はく「五欲の法を知らば、歓楽有ること無し。暫くも停まること得じ。犬の枯れたる骨を齧るに、飽厭あく期無きが如し」と者へるは、其れ斯れを謂ふなり。

（下巻第十八縁）

景戒は「愛欲」のすさまじさ、抑えがたい衝動を認めながらも、その衝動に押されて性欲に身を任せることを厳しく戒めている。下巻第十八縁の経師と女の死、とりわけ女の最期の凄惨な描写は、まさに読み手に「邪淫」の罪の重さを強く印象づけることに役立つたであろう。その点では、下巻第十六縁「女人、濫みだらしく嫁ぎて、子を乳に飢えしめしが故に、現報を得し縁」にも同じことが言えよう。この女は「姪いぢぢ汰」な本性に従い、男たちからの「愛欲」を受けるままにして「濫みだらしく嫁よめ」ぎ、「邪淫」にひたつたことが母性の放棄へとつながり「乳の脹るる病」という罪報を蒙ったのであり（「我、齡とと丁ぢなりし時に、濫みだらしく嫁よめぎ、邪淫にして、幼稚せむせ子を棄すてて、丈夫むすこと俱ともに寐ねぬ。多あまたの日を逕へて、子乳に飢う」）（傍線は稿者）とある）、これもまた、「邪淫」の罪業の深さをその報いの大きさによって告発した説話のひとつである。中巻第二縁「鳥の邪淫を見て、世を厭ひ、善を修せし縁」で、主人公の和泉国大領が鳥の「邪淫」をきっかけに世を捨て仏道に身をささげる。「邪淫」を目撃し、「邪淫」に象徴される欲望に満ちた現世に背を向けることがここでは改心へのプロセスとなっている。

その一方で、仏道修行者の性的な願いがその信仰によっ

てかなえられる、という説話も存在する。上巻第三十一縁「慇ねもろに勤つとめて観音に帰信し、福分を願ひて、現に大福徳を得し縁」では、吉野山で仏道修行に励む男、御手代の東人が観音菩薩に「南无、銅錢万貫、白米万石、好き女多あまた、徳施したまへ」と三年もの間祈り続けた結果、福徳（富、地位（五位）、二度の良縁）を得る。最初から現世利益目当てで修行を始めた（吉野山に入り、法を修して福を求めき）東人の世俗的な願いは、その厚い信仰と観音の威徳によって見事に叶えられる。

東人、現世に大福徳を被りき。是れ乃ち修行の験力にして、観音の威徳なり。更に応へたまはざらむや。

（上巻第三十一縁）

ここには、仏道修行者東人の金銭や色欲における素直な欲望に対しての非難や戒めはない。実際に観音菩薩が現世利益の仏であることもその理由のひとつであろうが、巻第三十一縁は何よりも、東人の一途な信仰に観音が応え願いを叶える、感応譚となっている。この物語では、東人の厚い信仰心と熱心な修行、そして観音の「威徳」の偉大さを讃えることに力点が置かれており、東人の願いの内容その

もの——「銅錢万貫、白米万石、好き女多」に非難を向け  
ることはない。少なくとも上巻第三十一縁には、「好き女多」  
を望む東人の望みを、「邪淫」と断ずる様子はみられない。

中巻第十三縁の場合はどうだろうか。池辺実氏は、中巻  
の第十三縁の優婆塞が下巻第十八縁の経師と決定的に違う  
点として信仰の有無を挙げ、『靈異記』に説く善因の最高  
は深信である。六時ごとに願っていた優婆塞の願にに応じて、  
天女が感応し給うた事實は、優婆塞の深信の実証にほかな  
らぬ、と編者は受け取った。(中略) 在家仏教者において、  
罰せられるのは、人間自然の情たる愛欲ではなくて、無信  
ゆえに愛欲を超えた邪淫である」(『日本靈異記』中巻の第  
十三吉祥天女説話について)『文学研究』四十七(昭和五十三年)  
所収)と論ずる。そのとおり、吉祥天女の感応譚である中  
巻第十三縁は、吉祥天女に願を立て一途に祈る優婆塞の深  
い信仰に応える吉祥天女の靈験にこそ主眼があり、吉祥天  
女に対する優婆塞の愛欲よりもその信仰心を景戒は重視し  
ているのであろう。

しかし同時に、吉祥天女の感応に優婆塞が「慚愧」し「媿  
ぢて」いることも明記されている。永田典子氏は、「天女像  
の行為が優婆塞の「如三天女」容好女賜我」という祈願の  
通りに応じたことにならないこと、更に、本来畏敬の対象

である天女像を淫水で汚してしまったという後悔の念によ  
って、優婆塞は天女像の感応を善報として体得していない  
ことになる」(永田「吉祥天女感応譚考——『日本靈異記』中巻  
第一三縁について——」『上代文学』四十五(昭和五十五年)所収)  
と指摘する。深い信仰を捧げ、その結果として感応を受け  
た本人が善報として受け取っていない善報とは、いかなる  
ものだろうか。また、優婆塞に恨みを持った弟子が里人た  
ちに吉祥天女像と優婆塞の交接を「誦りて」暴露したのは、  
仏道に仕える身でありながら吉祥天女像に愛欲を抱き挙げ  
句に汚し奉った師を、不邪淫戒を破り仏像を汚したとして  
誹謗することに目的があつたろう。それを受けて里人たち  
が寺に押しかけ優婆塞に真相を話すよう迫つたことから、  
そのことが裏付けられる。吉祥天女の示した感応と、感応  
を受け止めた人間とその周囲の人間には、ズレがあるとい  
つてよい。

それでは、「慚愧」と「媿」、そして末尾の一節「多淫の  
人は、画ける女にも欲を生ず」は、吉祥天女感応譚として  
の中巻第十三縁においてどのような役割を果たしているの  
だろうか。中巻第十三縁の優婆塞は、その「愛欲」ゆえに  
断罪された様子はみられない。寺に押しかけた里人たちが、  
吉祥天女像との交接の証を目にした後、そのことによつて

優婆塞を責めたという記述もない。優婆塞が主人公の上巻第三十一縁は愛欲に満ちた「願」は無批判のまま受け入れられ、その敬虔な信仰心にと修行に込める観音の「威徳」のみに焦点が絞られている。だが中巻第十三縁では、深い信仰により吉祥天女の感応を得た優婆塞の「慚愧」が描かれており、その点で上巻第三十一縁とは明らかに一線を画している。人間の美女と吉祥天女像との大きな違いはあるにせよ、中巻第十三縁の興味がもしも吉祥天女の感応譚のみにあつたとしたならば、もう少し違った展開になつたのではないか。

優婆塞が吉祥天女像と夢の中で交接したことを悟つた時、吉祥天女が自分の切なる「願」に感応を示してくれたことを知つただけでなく、自らの愛欲に満ちた「願」の業の深さに気づいたからこそ、「慚愧」し「媿ぢ」たのではないだろうか。末尾の「多淫の人は、画ける女にも欲を生ず」は、優婆塞の愛欲の業の深さ、いや優婆塞のみならず中巻第十三縁の——『日本霊異記』の読み手も、景戒自身も含めた人間全ての愛欲の業の深さについて、改めて念を押す役割を果たしている。吉祥天女は感応によって優婆塞の深信に込めただけでなく、優婆塞の愛欲を浮き彫りにさせ

て優婆塞に「慚愧」を内発させ、愛欲を捨てた純粋な信仰心を促した、とみるのは穿ち過ぎだろうか。その場合、「浄」は吉祥天女の感応の奇跡を示す証であるだけでなく、信仰厚いとはいへ愛欲を捨てることのできなかつた優婆塞の「ハヂ」の証であるともいえる。その証を里人が目撃することによって、吉祥天女の靈威が衆人に示されるだけでなく、はじめ「媿ぢ」て隠されていた優婆塞の「ハヂ」が、衆人にさらされることもある。そのことによつてかえつて、優婆塞の愛欲は浄化されたのではないか。悪報が衆人の目にさらされて「恥」を覚えることにより救済されるといふ論理が、古代には存在していた。

優婆塞は愛欲に満ちた「願」を、心からの信仰心をもつて吉祥天女像にかけた。その吉祥天女の「感応」により、「天女の如き容好き女」ならぬ天女像と交わり、かつ己の愛欲の深さを「慚愧」するに至つた。中巻第十三縁は、修行者の現世的な欲望と深信という、一件矛盾した題材を扱いながら、まさに深信の「感応」によつて己の欲望の罪深さを知り、「慚愧」して発心へと導かれる、感応譚にして教訓譚であるといえよう。